空を見上げては君を想った

Tsunaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空を見上げては君を想った

【Ｎコード】
Ｎ４３８７Ｘ

【作者名】
Ｔｓｕｎａｋｉ

【あらすじ】
私は知らなかった。
貴方が空を見上げては、想いをはせていたことを…

優しい思い出【前編】（前書き）

ノロノロ亀更新してきます

優しい思い出【前編】

優しく垂れた丸い瞳が、私を見て細められる。
薄茶の髪を風で揺らしながらあの人が紡いだ言葉は、今はもう聞こえて来ない。

「ちょっと朱里！転校するってホントなの！？」
目の前の机に勢い良く手をついたかと思うと、教室中に響くような声で叫ぶ友達。
私は慌ててそれを制した。「ちょっ！ひかる声大きい！！」
僅かにざわめく教室を見渡して、ため息をついたあと、ひかるは呆れたような表情で私の前の席に腰を下ろした。
「さっき職員室で矢口先生が言ってた。４組の萩原って朱里だけだよね！？」
小声ながらも責めるような口調。心から申し訳ないと思った。
「ごめん…。結構前から決まってたんだけど、まだ日にちあるし、なるべく長くいつも通りでいたかったっていうか…」
言っているうちに、また悲しくなってきた。
涙がでそうになっていると、それを察したひかるがちり紙を差し出しながら苦笑する。
「そんなこと言って、こっちに覚悟する時間もくれないの？アタシ

らだって寂しいよ。日にち差し迫ってからいきなり言われてたら、きっと余計にね。」
優しくなったひかるの声に、私は更に泣きたくなった。

私がこの町にきて最初に友達になったのがひかるだった。
小学校入学と同時にこの町に越してきて、生まれて初めてできた同性の友達。
小学校からずっと同じクラスで、よくケンカして、そのたび泣きながら仲直りしてた。
目指すものが特に無いと2人で愚痴りながら、だったら一緒の所でこれから考えようよ、と高校へ進学した。
唯一無二の親友。
でも…
だからこそ言えなかった。転校するのは、県を3つ程跨いだ所の私が生まれた県で、簡単には会えなくなる。
寂しすぎて、言えなかった…

「そっか…じゃあまたそっちに戻っちゃうんだね…」
ひかるが叫んだおかげで、私が皆に言う前に、私の転校の件は皆の知るところとなっていた。
仲のいい友達が私のまわりでため息をつく。
私はただ、頷くことしか出来なかった。
やっぱり皆の寂しそうな顔を見ると、胸が締め付けられる。
「あ、でもさ…」
ふいに、ひかるが口を開いた。

何かを思い付いたらしい彼女は、悪戯な笑みを浮かべている。
「そこに戻るってことは、初恋の君もいるって事だよねぇ？」
さっきまでひどくしおらしく落ち込んでいたと思えばすぐこれだ。
脳内の半数は恋バナで出来ているだろう親友を見て、私は思わず笑ってしまった。
「初恋の君って言ったって、五歳の時の事だし…」
ふぅん…と呟いて、彼女は私の鞄をあさりだした。
「ひかる！？」
止めようと手を伸ばすと同時に彼女の手の中にあったパスケース。
「あ！！」
「じゃ、これは何かにゃ～？」
ひらひらと掲げられたその中には、一枚の写真が入っていた。
「え！何それ！」
「見せて見せて！」
すっかり写真に興味がいってしまった彼女達に、隠し通せるはずもなかった。

それは、私がまだ五歳の頃の写真。
お気に入りのワンピースを着て上機嫌の私を、抱っこしている年上の男の子。
彼もまた、嬉しそうに笑っていた。
「ちょっと朱里！誰なのよこの子！」
「や～ん可愛い！」
思い思いにキャイキャイ騒ぐ友達を尻目に、私はひかるを軽く睨んだ。
彼女は小さくおどけてみせただけだった。
「別に恥ずかしい事じゃ無いんだし、教えてあげなよ。」
ひかるがそういうと、一気に期待の眼差しが私に集まる。
どうして皆こう恋バナがすきなのか…

私は覚悟を決めて話し出した。

十年と少し前…

「おひっこひー？」
「違うわ、お引っ越しよ。」
「おひっこしー？」
「そうお引っ越し。」
「おひっこしってなぁに？」
引っ越しというのがいまいち分からなかった私は、お母さんの顔をのぞきこむ。お母さんは荷造りの手を止めて、私の顔をみた。
「お引っ越しっていうのはね、ここじゃないお家に住むことよ。」
「おうちじゃないの？」
「そう。遠くのお家よ。」「とーごくんち？」
私の言う遠くがすぐ向かいの家だったことに、お母さんは思わず笑った。
「違うわ朱里。燈悟君のお家はすぐ近いでしょ？」
私が不思議そうに首を傾げるのを見て、お母さんは、「仕方ないか。」
と苦笑した。
他の子より少々おっとりしていた私には、説明されても引っ越しの意味がわからなかった。
ただここのところ、家の中がすごくスッキリしてしまったとは感じていたんだけど。
お母さんが荷造りを再開すると、チャイムがなった。続けざまに二

回。
「あ！！とーごくんだ！」
私は玄関まで走る。
チャイムが続けて二回は私達のルールだった。
「とーごくん！」
「あかりちゃん！あそぼ！」
お向かいの家の夏川燈悟君がそこにいて、嬉しそうに笑っていた。
「なにしよっか？」
「こうえんいこ！」
「わかった！まってて！」私は居間に駆け込んだ。

「おかーさん！こうえんいってきます！」
お母さんが笑顔で頷くのを確認してから帽子を被って駆け出す。
燈悟君と連れだって、私は近所の公園に行った。
平日の昼間の公園は、あまり人がいない。
遊具には乗り放題で、私達はよく公園で遊んでいた。燈悟君は、私と同じ年の男の子で、一番の仲良しだった。
幼稚園にも保育園にも行っていなかった私達はお互い以外に友達がいなかったんだ。
だから2人で日が暮れるまで公園で遊ぶのがいつものことだった。
そしてもうすぐ帰ろうって時に、決まってその声が聞こえてきたんだ。
「燈悟〜、朱里〜、帰ろう〜。」
公園の入り口で手を振る人影に、私達は遊びの手を止める。
こっちに歩いてきたその男の子に最初に走りよるのは、いつも私だった。
「だいごくん！」
駆け寄って抱きつくと、彼は優しい手で頭を撫でてくれる。
「おにいちゃん！」
続いて燈悟君も抱きつく。彼は、夏川大悟君は、嬉しそうに笑って

くれた。

優しい思い出【前編】（後書き）

中途半端なところですいません？
後半に続きます

優しい思い出【後編】

燈悟君と、そのお兄ちゃんの大悟君と歩きながら帰るのは、私の楽しみのひとつだった。
燈悟君といるのは楽しかったし、五歳年上の大悟君は、いつだって優しかった。本当のお兄ちゃんみたいに私を可愛がってくれた。
でもお兄ちゃんみたいじゃなくて、私は大悟君が大好きだった…
「そうだ！だいごくん、とーごくん！あかりね、おひっこしするんだって！」
事態がよく分かっていなかった私は、確かにその時まるで発表会の主役になったことでも言うみたいに二人に言った。

その時の燈悟君の不思議そうな顔も
大悟君の驚いた顔も
私は今も忘れない。

「え……朱里、引っ越しって…どこに…？」
ひどく狼狽えて、大悟君はしゃがみこみ、私と視線を合わせる。
「わかんない。おひっこしするの、っておかーさんがいってた。」
私がキョトンと答えると、大悟君が悲しそうに眉を下げた。
「…そっか。」
それっきり大悟君は黙って私と燈悟君の手をひいて歩きだす。
「お兄ちゃんどうしたの？」
やっぱり不思議そうな燈悟君の声と、相変わらず悲しそうな大悟君

の様子に、私は段々不安になっていった。
私の家に着くと、大悟君はいつもみたいに家のチャイムをならす。
出てきたお母さんは大悟君の顔を見た途端驚いた様に声を出した。
「だ、大悟君！どうしたの？」
見上げた大悟君は、泣いていた。
「だいごくんどうしたの？」
初めて見たその顔に、私の不安は倍増する。
「良江さん…引っ越しってどこに…？どこ行っちゃうの？」
大悟君の問いに事態を察したお母さんが、悲しそうに息をはく。
「ここから3つくらい離れた県よ…。今まで朱里と仲良くしてくれてありがとうね大悟君、燈悟君…」
お母さんが二人の頭を撫でながら微笑んだ。
燈悟君も何か嫌な感じがしたらしく、大悟君のシャツの裾を引っ張って大きな声で呼び掛ける。
「ねぇお兄ちゃん！どういうこと！」
そんな弟の手をとって、大悟君は踵をかえす。
私の不安はどんどん膨らんでいって、泣きそうになりながらお母さんに聞いた。
「ねぇ、どういうこと！おひっこしってどういうこと！」
お母さんは悲しそうに笑って、
「大悟君と燈悟君にさよならしなきゃね…」
とだけ言った。

さらに数日後、私は事態がよく呑み込めないまま、車に乗せられていた。
この数日でなんとか理解したことは、家族の様に育った二人と離れなければいけないということ。
寂しい…

悲しい…
嫌だ…
ごちゃ混ぜな感情に、しゃくりあげながら、私は何度も二人の名前を呼んだ。
「やだ…よぉ…とーごくん…！だい…ご、くん！」
泣いても泣いても悲しみは和らぐことはなくて、胸が痛かった。
その時、
「あかりちゃん！」
「朱里！」
ずっと名前を呼んでいた二人の声が、私の名前を呼んだ。
走ってくる二人の姿に、私はすっと涙が止まる。
「あかりちゃん…ぼく、さみしいよ…行かないでよぉ…」
私が車から降りると燈悟君はそう言って泣き出した。止まった筈の涙が、また溢れだして頬を伝う。
生まれた時から一緒だった。兄弟のいない私にとって、ふたりはまさしくそれで毎日が楽しかった。
離れたくない…
しゃくりあげるせいで息が苦しくなりだしていた私は、突然体が浮くのを感じた。
「朱里…」
いつもの優しい笑顔の大悟君が、そこにいた。
優しく垂れた丸い瞳、風に流れる薄茶の髪…
大好きな大悟君だった。
「ね？朱里。確かに朱里はお引っ越ししちゃうけど、僕らとずっと会えないわけじゃない、分かる？」
私を抱っこしてそのまま片手で背中を擦ってくれる。温かい手に、涙がひいていった。
「朱里がお姉さんになって、うんと綺麗になったらまた会おう？」
大悟君はニコリと笑って、私を高くあげる。
まるで高い高いみたいに。そして口を開いた。

「　　」
大悟君が私を降ろす前に、お母さんの方を指差して笑った。
カメラを持ったお母さんがいて、私はその日初めて笑うことができた…

「で、それがその時の写真か。」
パスケースの中で笑う幼い私は、ついさっきまで泣いていたとは思えないほど、嬉しそうに笑っていた。
その時友達の一人が口を開いた。
「この写真とるまえに、その大悟君に言われたことは覚えてないの？」
…そうなんだ。
色んな会話の細かいところまで覚えてるのに、なんでか大悟君が最後になんて言ってくれたのか全然覚えてない。
その言葉で、私は笑顔になれたのに…
「でも、良かったじゃん。約束通り、また会えるもんね。」
「お姉さんになったかは疑問だけどねぇ～？」
からかうような友達の口調に私は思わず赤くなる。

「失礼な！そ、それに、初恋は初恋！別にまだ好きとかじゃ…」
へ～え…と、ひかるが口角を上げる。
「じゃあな～んでモテるのに彼氏は作らない、オマケにま～だ子供の頃のツーショット写真を後生大事に持ち歩いてんのかな？」
…ひかるには敵わないよ…

私は、あれから一度も会えずにいる大悟君の事を、まだ好きでいるのだった。

再会【前編】

転校がバレて（？）から1ヶ月。
私がこの町で過ごすのも、あと二週間になった。
学校の帰り、ひかると歩きながら色んな所に目をむける。
よくお茶したちっちゃいカフェ。
ひかるが財布を忘れてった雑貨屋さん。
小学生の頃、犬が怖くて通れなかったお屋敷。
思い出が沢山ありすぎて、忙しいくらい。
私の話しに耳を傾けてくれているひかるは、たのしそうだった。

「なんか朱里、最近やけに楽しそうじゃない？」
私がよく遊んだ公園で立ち止まっていると、ひかるが顔を覗き込んできた。
ニコニコと笑うひかるこそ、楽しそうだ。
「こうやって町中を見てみるとさ、やっぱり思い出の場所ばっかりなんだよね。見てたら楽しくて…」
私がそう言うと、さっきまで笑っていたひかるが急に真面目な顔になった。
「ねぇ、朱里？」
「何？」
「アタシたち…ずっと親友だよね？」
予想もしなかった質問に、私は息をのんだ。
なんでそんな事聞くの？そう聞きそうになって言葉を呑み込む。
ひかるはいつも笑っていて、私の転校を聞いてもいつも通りだった

から、気付かなかった。
違う。ひかるの優しさだったんだ。私が気付かないようにするのが。
ひかるの寂しさを私が悟らないように、余計寂しくならないように…
「当たり前！ずっとずっと親友！」
親指を立てて言うと、ひかるはほっとしたように笑った。
「だよね！」
その日私達は、いつもより遠回りしながら家路についた。

二週間という日々は余りにもあっという間で、気づけば家の中には何もなくて、トラックは家具でいっぱいになっていた。
「…はやいね」
見送りに来てくれたひかる達が、寂しそうに笑う。
人生の殆どを過ごした土地を離れるのは、とても寂しくて、気づけば涙が止めどなく溢れていた。
「うぅ～…ひかる～！」
思わずひかるに抱きつく。大きな瞳を潤ませていた彼女も堪らず泣き出し、それにつられてまわりの友達も泣き出す。
「朱里、元気でねぇ…」
「頑張って…！」
温かい言葉のなか、ひかるが大きく息を吸って口を開いた。
「アタシらもう高校生なんだから！メール出来るし、行く気になれば遠くたって…！」

そこまで言って再び涙で言葉を詰まらす。
確かにメールはできる。でも毎日会って笑い合っていた今までの生活はもうできない。
それがひどく悲しかった。
「うん…！メール、いっぱいしよ！電話も…するから！」
涙で霞む視界の中で、ひかるが笑う。
両親に促されて車に乗り込み、友達に手を振ると、皆が泣き腫らした瞳を細めて笑っていた。
「またね、朱里！！」
「遊びに来てね！」

そう、もう子供じゃない。私達は、自分達の力でまたあえるんだ。
そう思うと、私の顔も徐々に綻んでいった。

―朱里…―

誰…？

―朱里…―

誰？

―…嫌だ！！嫌だ！！！―

朱里――――！！！！！

「嫌ぁ！！」

いつの間に眠ってしまったのだろう。

車の後部座席で横になっていた私は、自分の声で目を覚ました。

凄く、嫌な夢を見ていた気がする。

思いだそうとすると頭が痛くなるような、そんな夢。

「朱里！？どうしたの！？」

お母さんが心配顔で振り向く。

運転中のお父さんも、バックミラー越しに心配そうに私を見ていた。

「ごめん……変な、夢見た…」

そう言うと、二人とも安心したように前に向き直った。

起き上がって周りを見渡すと、そこはやはりどことなく懐かしい、

でも初めてのような気もする、生まれてから五年間を過ごしたところだった。

「もうすぐ…だよね？」

お母さんに問いかけると、楽しそうな声が返ってきた。

「あら、ここら辺覚えてるの？そうよ、もうすぐ着くわ。詳子ちゃんがずっと管理していてくれたのよ。」詳子ちゃんというのは燈悟

くんと大悟くんのお母さんのこと。
私のことも本当の子供の様に可愛がってくれていた。
「懐かしいなぁ、この辺はよく遊びに来たし…」
そう言って、伸びをしたとき、私の目に小さな公園が飛び込んできた。
「あっ！」
紛れもなく、幼いころ燈悟くんと遊んだ思い出の公園。
遊具も砂場も、何一つ変わってはいなかった。

「お父さんお父さん！ちょっと止まって！！」
慌てて運転席のお父さんの肩を叩いた。
「な、なに！？」
驚いたようにブレーキを踏んだお父さん。
私は声もかけずに車を出た。
「朱里？どこいくの？」
振り向いたお母さんに向かって公園を指差せば、驚いたような顔が少しずつ綻ぶ。
「あぁ…。家までの道は覚えてる？」
頷いて歩き出す私の背中にお母さんの声が飛んできた。
「夕方には帰ってきてね。」
その言葉に小さく返事をして、私は足を早めた。

懐かしくて、
嬉しくて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4387x/

空を見上げては君を想った

2011年12月23日20時48分発行